新刊紹介

大無量壽經の概要

金子　大榮著

本書は先に公にせられた「教行信證の概要」の姉妹篇であつて昭和二年春から同四年末までの間、前後二十八回の連續講演の摘要集である。而してこの三年の間に、先生は大谷大學の教職を退かれ、緇衣を脱せられ、更に嚴父を失はれた。この三年は實に先生の生涯に大なる時期を劃するものである。先生は曰ふ「これらの事變は、私の心を亂し、悲しみに沈ましめた。しかもまた私は如何に多くこれらの事變に依りて育てられたことであらう。私はこの小著に於ても、その當時の私の内生活を見ることを得るのである。それと共に、私はこれらの事變の度毎に四方の同友より受けし恩誼を忘るゝことが出來ぬ。私はそれらの恩誼に依つて私の一身は單なる私の身でないことを思ひ知らしめられた。さればこの小著が多かれ少なかれ讀む人の同感同證を得るものがあるならば、その内容は事變の賜であり、その功德は同友の物である」と。我等はこの短かい語に、法難に遇はれた古の高僧を思ひ出さしめられる。先生が現在の如き地位に立たれた事が如何なる意味を有するかは、やがて清算せられる日が來るであらう。ともあれ我等は先生が飽くまで身を謙讓に、而も炬の知き信仰を抱いて進まれる姿を、有難くも思ひ、悲壯にも感ずる者である。

さて本書は總說と各說とに分れてゐる。總說に於ては、大無量壽經の全體を概觀して、經典を有つことの意義、大無量壽經の眞實の教たる所以を記し、次に如來の本願と衆生の往生との關係に及び「本願の如來は念佛の衆生に内在せらるゝ。それはやがて、本願の果なる淨土と、念佛の果なる往生との不離なる關係を知らしむるものである。」「淨土は本願成就の世界であるその莊嚴功德は、これ、如來の願心の象徵である。それは大悲の願心のいろかたちである。そのいろかたちは、また願心莊嚴なるがゆへに、そのまゝ無色無形である。それを色形に執へられ、淨土を感覺的にのみ思想するものは、唯だ淨土の名を知りて、その本願成就なることを知らぬものである。されば本願を信知することは、純眞なる淨土に往生する因である。……謙虛の心を以て、本願を聞けば、自然にその本願の眞實なることが領會せらるゝのである。本願の眞實は本願自ら自證する。この自證の外に信心はない。」と。次に五惡段、それは康僧鎧譯本及び如來會にのみ存する。その五惡段存在の意義を述べて居られる。

次いで各說に入つて、(一)佛說無量壽經、(二)久遠の經說、(三)相念の世界、(四)法藏比丘と世自在王佛、(五)四十八願總說、(六)國中人天に就いての願、(七)十方攝化の願（如來の回

向、大悲の願心、(八)無窮菩提の願(國中の菩薩に就いて、他方の菩薩に就いて)、(九)本願の理想と現實、(一〇)永劫修行の意義、(一一)彌陀成佛の諸相、(一二)淨土の莊嚴、(一三)無爲自然の領域、(一四)念佛往生、(一五)往生人の三類、(一六)菩薩の往勸、(一七)忠求佛道の樂、(一八)欣淨厭穢の教誡、(一九)生死流轉の苦、(二〇)世間善の根據、(二一)顯界と冥界、(二二)佛遊履の國土、(二三)居生と化生、(二四)遇法難信。と二十四章に分けて記して居られる。

筆者は右の各章の內容を紹介するだけの紙面を有しない事を遺憾とするが、一言讀後の感を記すならば、先生は讀者を豫定して教を說くと云ふ態度ではなく、飽くまでも自身の領解を同朋の前に述べて居られるのである事である。而してその領解たるや、透徹したる理論に依つて深き體驗と篤き信仰とを吐露して居られる。筆者が此處に云ふまでもなく、教壇の中には、先生を以て異端者として放逐した人々がある。而して又一方には先生の學を慕ひ、德を慕ふ幾多の學徒がある。前者は、正に本書に對して、夫が異解であるか否かを、嚴密に批判して、此を自日の下に公開すべき義務があるであらう。而して後者は正に秋燈の下に繙いて、その久しき渴を癒す可きであらう。(四六判クロース裝、百七十頁、價壹圓參拾錢。文榮堂刊)(K・K)

Bibliotheca Buddhica. XXIII,

Abhisamayālaṅkāra-prajñāpāramitā-upa-

deśa-śāstra, of Bodhisattva Maitreya. Edited, explained and translated by Th. Stcherbatsky, and E. Obermiller, Fasc. I. 1929, Leningrad.

Bib. Bud. XXIV.

Indices verborum Sanscrit-Tibetan and Tibetan-Sanscrit to the Nyāyabindu of Dharmakīrti and the Nyāyabinduṭīkā of Dharmottara, I. Sanscrit-Tibetan Index. compiled by E. Obermiller. 1927, Leningrad.

Bib. Bud. XXV.

(The Same), II Tibetan-Sanscrit Index. compiled by E. Obermiller, 1928, Leningrad.

Bib. Bud. XXIII,

Bodhicaryāvatāra (Çāntideva), Mongolskii Tekst s trekhiazietchniemi

ukaza'elmi, izd. B. A. Vladimirtsov.
1929, Leningrad.

露西亞の革命も或る程度に成功して、大戰前帝政時代にその皇室學士院より出版されてゐた Bibliotheca Buddhica なる叢書も、革命のために一時は絶望的のものと考へられたが、幸ひにも引續き CCCP(=USSR) の學士院によつて繼續刊行されることゝなつて、こゝに上記の四册が最近に吾人の眼を捕へた。Main Editor は戰前と同じく S. F. Oldenburg 教授である。そしてそこに最も活動的なるは依然として Th. Stcherbatsky 教授であり、新らしく活躍を初めた人は同氏の弟子なる E. Obermiller 教授である。上記四書中第一を主として簡單な紹介をなし、此の叢書の健在を慶びたいと思ふ。

第一の Abhisamayālaṅkāra (現觀莊嚴)は瑜伽行派の祖たる彌勒の著作にして梵本は少なくも三本は現存する。漢譯中には見出されないが、西藏譯には本文は勿論多くの註釋書も存在する本書が彌勒作なることは宇井教授も確認してゐられる(印度哲學研究、第一卷、三八六頁)。今出版せられた第一輯には序言、梵文テツキスト及び西藏譯 (by Ñog Lodan-Śeirab (1059—1109)) を收める。內容は八章に分たれすべて偈頌より成る。本論の取扱ふ問題は、二萬五千頌般若(大品般若)を主とし他の十萬頌、八千頌等の般若經典に現はるゝ般若教學の統一的攝要である。故に Prajñāpāramitā-upadeśa と呼ばれる。殊に實修的方面を主とする。編者も言ふが如く「經中に擧げられたる殆んど總ての重要なる問題を、記憶に便なる偈頌の簡決な書方に含ましめた著者の手腕は、實に驚嘆に値する。」(序言、六頁)しかし此の故に註釋書の說明無しには解し得ないものとなつた。つまり「經中に聯絡なく表はされた主題が、本論中に系統的に排列され而して註釋書中に於て說明された」(八頁)のである。註釋書としては Haribhadra: Abhisamayālaṅkāra-ālokā が存する。此れも此叢書中に出版される筈である。猶日本佛教學協會年報(一)中に荻原雲來氏の研究がある。

第二及び第三は一聯をなす。既に同叢書第七及び第八に於て Nyāyabindu 及び Nyāyabindu-ṭīkā の梵文テツキスト及び西藏譯が Stcherbatsky 教授によつて出版されてゐる。(但し一部分)今此等兩書の遂字的索引が刊行され、梵藏及び藏梵の兩方面より檢索されうることゝなつた。佛教論理學の研究には極めて便利にして缺くべからざるものであらう。

第四は寂天の菩提行經の蒙古語譯 (Chos-kyi Ḥod-zer'a と稱せられる) の出版で、第一輯として編輯者の序言と本文とを載せる。序言はすべてロシア語を以て書かれてゐるから讀むことは出來ないが、主として所依の原本のことに關するらしい。とにかく佛教研究の領域に於て蒙古語譯、滿州語譯原典の使用が必要視されるべき時代が既に來てゐることを私は感ずる。

以上四册が Bibliotheca Buddhica 中の新刊であるが、此叢書は今日確實な基礎を得たから今後の佛教研究界に最も重要なる役割を演ずるものとなることは明らかであらう。(龍山)

東洋史概說

白鳥　清編

本書は編者が白鳥庫吉博士の藏された稿本を獲てそれに取捨を加へ地圖を挿入し體裁を整理して世に公にせられたものである。

凡そ東洋の複雜極まりなき幾多民族の隆廢及びその文化の交流を綜合して要約し以て東洋の歷史を概說することは至難の業である。本書はこの至難の業を臆面なく成就したものと云ふべきものにして、常に東洋全局の視野に注目し枝葉末節に走らず東洋史の大綱を描寫するにその妙を得てゐる、且つ叙事の簡明と內容の豐富さとは、數千年を經とし幾百萬里を緯とせる東洋諸民族の盛衰及び文化の消長を表現するに十分にして餘す所がない。而して歷史は偉人英雄の傳記でもなければ單なる政治史戰爭史でもない。且つ過去の事實の單なる年代的羅列でもない一國の歷史はその國の民族全體の流動の姿を系統的に說明し評論したものであらねばならぬ。編者の意はかゝる點にも十分用ひられてゐるのを覺ゆるものである。

今內容を觀察するに先づ序說に於て一般東洋の地理及民族を概觀して後、章を十四に分ち、一支那の古代、二漢民族の政治的分裂、三漢民族の政治的統一、四印度の古代、五兩漢の外國經略、六支那の分裂、七北方民族の活動、八隋唐の外國經略、九唐室の衰弱、支那の分裂、十宋と遼金との對立、十一蒙古の强盛、十二明代の形勢、十三淸朝の盛時、十四近代の東洋、となし、各時代の特異性を握んでそれを年代順に略說してある。この章の分ち方又その表題の示す通り本書は一般東洋史に古代中世近世と云ふやうな大別した見解を立てたものではなく歷史の流れを簡明に要約概說せられたものにして、且つ松井氏の東洋史概說に比すれば支那史中心の書なることに思ひ到るのである。卷末に附せられた六葉の附圖は又以て參考の資たるに十分である。斯學研究者に裨益することは勿論なるも、高等學校大學大學豫科生の好個の參考書と思ふものである（昭和五年四月東京本鄕白林社發行、菊版約二六〇頁、定價二・三〇）（野上）

東洋史概說

松井　等著

近年東洋史に關する研究は幾多貴重なる資料の出現に依つて長足の進步を遂げた。本書はその最も新しき見解と精細な研究の結果とを根底にして亞細亞大陸の過去から現在への事象の變移を其の流動の姿に於いて說明したものである。卽ち考證學的東洋史の研究を基礎にして新しく文化史的に觀察を下せしものに他ならぬ。而してその稿は著者が多年東都の諸大學諸專門學校で講述せられた講案に整理を加へられたものにして大學豫科又は高等學校に於ける授業程度を最低の標準とせられしものである。

而して本書の特長はその時代區分にある。著者は云ふ、凡そこれまでの東洋史の時代區分にも支那史のそれを採用して來たのである。然し從來の支那史の時代區分は王朝の交替か又は民族の鬪爭を目標とする輕便の區別であり、支那民族の生活變遷に就いての精細なる考察の結果に由るのではないやうに思はれる。勿論支那は東洋史上に於て最も廣き範圍を占め最も重き意義を含んで居るから東洋史の記述に方つて支那に關する事が大部分を占めるのは當然の事情であり、又東洋史上の時代を大別するについて支那史のそれに準據しても差支へはない。然し今日に於ては支那史と東洋史とを學術上差別して取扱はなければならない。從つて支那史上の從來の輕便なる時代の大別をそのまゝ今日の東洋史上に適用することは避けなければならない。と。

著者は數千年の東洋の歴史を古代、中世、近世に三大別して大略上古より漢代まで則ち支那印度の二大民族の交渉の開かれんとするまでを亞細亞文化の派生時代たる古代と見なして、それを古代支那と古代印度の二部門に分けてゐる。次ぎに佛教の支那傳來によつて次第に支那の文化は印度その他西亞細亞等の文化と交渉し東洋諸文化の交流時代を出現したのであつてこの時代を中世と名付け明末までに及んでゐる。この間支那に於ては魏晉の世から東晉、南北朝を經て隋唐となつて支那民族の極盛時代を現出し宋代に至つては塞外の諸民族に苦しめられ、次で蒙古民族全盛の世となり、さらに明朝はこの蒙古民族を支那内地より驅逐したるも晩年に方つて滿州民族の爲めに亡ぼされることになつたのである。印度に於ては西北印度の大月氏國の沒落に次いでグプタ帝國起りさらにパルシヤ王朝起り、その末葉からは國内混亂に陷りさらに回教徒の印度侵入によつて印度は回教文化の脅威を被るに至つた。歐洲人が初めて印度への航路を發見したのはこの中世の末期である。ついで滿洲民族が清朝を建てた頃には歐洲人は南方海上から支那への交通貿易を開きつゝあつた。歐洲の文化は次第に東アジアに弘まり、キリスト教と科學とは相並んで支那を中心とする東アジアの文化圏に對して強き刺戟を與ふるに至つた。阿片戰爭以後歐米人の勢力と文化とは益々強く東アジヤに影響を與へた。印度に於ても同樣であつて英佛兒帝國は次第に歐洲人に脅かされ遂に英國の勢は全印度を風靡するに至つた。かくの如く歐米人の文化勢力の東侵につれてアジア一般に歐亞文化の混成時代が出現せしものにして著者は東洋史上これを近世と名付けてゐるものである。

要するに本書の特色はそが文化的考察であることに存する。東洋史を研究せんとする人は勿論、苟も東洋文化に興味をもつものゝ一讀すべき好個の書たるを失はず。敢て諸彦に勸む（昭和五年四月一日東京神田共立社書店發行、菊版約三五〇頁、定價二・八〇〈野上〉）

支那研究

慶應義塾 望月基金支那研究會編

本書の上梓されるに至つた由來を知る爲めにそのはしがきの文を示さう。

大正十五年九月實業家望月軍四郎氏は支那事情の研究に資するため、金拾萬圓の資金を慶應義塾大學に寄附されました。其時以來、慶應義塾大學は是に望月支那研究なる名稱を附して支那各般事情の調査研究に從事して居ります。其の事業の一として昭和二年以降は毎年春秋二期に各方面の專門家を聘して支那學並に支那事情に關する科外講座を開いて學生一般に聽講させて居ります。で本書は昭和三年四年の兩年度に於いて行はれた科外講義の大部分でありまして、諸篇の順序は編者が適宜に按排したものであります……」と。

さて本書の編入する所の論文は、一現代支那研究の態度（阪西利八郎）、二經濟上より見たる日支關係（有田八郎）、三民國革命史論（松井等）、四新しき中華民國の建設と日支兩國の關係（王大禎）、五北京政府時代の立法と行政（及川恒忠）、六大正四年の日支交渉（神田正雄）、七支那に於ける國際財團（根岸佶）、八支那の貨幣制度（木村增太郎）、九滿洲に於ける金融經濟問題（上田恭輔）、十佛蘭西に於ける支那研究（松本信廣）、十一先秦時代に於ける西方文化の影響（Henry Maspero）、十二目錄學概說（服部宇之吉）、の十二編、何れも敬服すべき名論卓說にして、且つ主として現代支那に關する政治經濟的研究論文なるも又支那史研究者の一讀すべきものである。就中松本氏の論文は佛蘭西に於ける支那研究の大勢を約說しMaspero氏の所說は現代歐洲人の支那研究の一端を窺ひ得るものにして、松井氏の民國革命史論と共に東洋史研究者の必讀すべきものであらう。（昭和五年六月東京神田岩波書店發行、菊版約四五〇頁、定價三・〇〇）（野上）

連歌の史的研究（前篇）

福井　久藏著

國文學史に於いて研究が最も遲れて居るのは鎌倉から室町にかけての時代である。而してそれは此時代の文學として最も重要視しなければならぬ連歌の研究、說話文學の研究等が不十分であつた爲である。連歌に就いては、早く佐々氏の連俳小史、近くは樋口氏の連俳史等があるが、共に甚だ簡單なものであつた。此他にも注目す可き研究論文があるが、從來の連歌研究は兎角俳諧の起源を明にせんが爲にせられたと云ふ傾があつた。俳諧史を明にせんとするには連歌を明にせねば成らぬ事は云ふ迄もない。然し連歌は單に俳諧の前身としてのみ價値を有するものでは決してない。連歌は連歌として、獨立に研究せられねば成らぬものであつた。この當然爲さるべくして未だ爲されなかつた、獨立した連歌の研究が、初めて現はれたのが本書である。

本書は前後兩編より成り、前編は連歌の起源から、その衰亡まで變遷の跡を考究し、後編は連歌に關する學書を始め、撰集句集、百韻、五十韻、世吉、歌仙、萬句等、二千四百餘部を解

題したものである。即ちこの前後兩編は、著者が前に著はされた「大日本歌學史」と「大日本歌書總覽」との關係の如きものであつて、後編は連歌の興亡の一々の事實を、事實のまゝに個々獨立に研究したものであり、前編はこの個々の事實を統合したものである。

扨前編は四十四章から成り、1連歌の名稱と起源、2初期の連歌及長連歌の發生、3連歌勃興期と柿本栗本二座、4欽定の連歌法、5連歌の擴布と流派、6連歌撰集の企、7連歌道の建立、8三賢時代、9二條良基の著作、10應安新式、11應安新式と建治新式との關繫、12式目の種類と懷紙、13菟玖波撰集時代の著名作家、14二條良基薨後の連歌界、15一條兼良と新式追加16清巖和尙の千句、17宗砌、18智蘊及宗伊、能阿、行助、專順19心敬、20宗祇、21新撰菟玖波集、22兼載、23肖柏、24三條西實隆、25宗長、26宗碩、水仙及玄淸、27宗牧宗養父子、28紹巴以前の同人、29紹巴、30昌叱と心前、31武將と連歌、32連歌師の地位、33式目と作物、34俳諧連歌の興起、35無言抄、36雲上の連歌、37柳營の連歌、38諸侯の連歌、39德川幕府の御連歌師40德川幕府の御連歌衆、41猪苗代家、42北野社坊の連衆、43連歌の沿革、44結論。外に附錄として「連歌の種類」及連歌の年表を載せてある。猶書中に宗祇の畫像、知連抄の首尾等十餘葉のコロタイプ版が挿入してある。

氏の著は、日本文法史大日本歌學史等に依つても知られる如く、簡潔に而も細大もらさず頗る要領を得たものである。蓋し此の如きは、悠々功を急がず、而も孜々として倦まざる篤學者にして初めて爲し得る事である。筆者はこゝに滿腔の敬意を表して、筆を擱かうと思ふ。（菊版四九五頁、定價四圓八拾錢、東京成美堂書店刊）（多屋）